第３章　平成 19 年度までのアンケート調査において明らかになっていること

磐田市教育委員会では、次のとおり、制度導入年度（平成 17 年度）より３年間（平成 19 年度まで)、保護者や教職員を対象にアンケート調査を実施してきた。このアンケート調査結果からは、ほとんどの保護者及び教職員が、本制度の継続・措置学年の拡大を望んでいること、学習面や生活面での効果を感じていること等が明らかになっている。本章においては、このアンケート調査結果を概観することとする。

35 人学級（ふるさと先生）制度に関するアンケート調査結果
（平成 17 年・18 年・19 年　いずれも９月調査実施）

（1）保護者

①　小学校措置学年（H17 は小１年、H18 は小１～３年、H19 は小１～４年）保護者

＜結果の概要＞

○　35 人学級制度の周知度は年々向上している。
（「制度を知っている」　平成 17 年度　40.6%　⇒　平成 19 年度　78.5%）

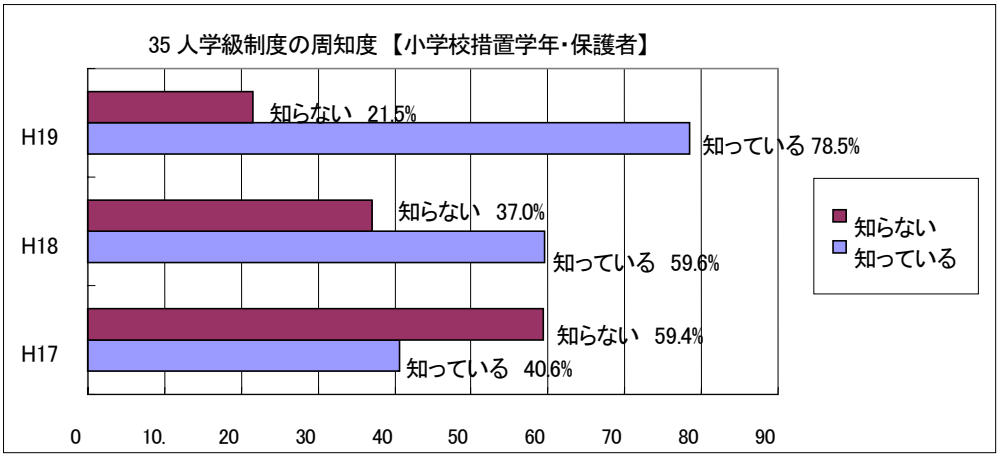
○　40 人編制と 35 人編制のどちらがよいかについては、ほぼ 100%の保護者が 35 人編制を望んでおり、年度ごとの割合に大きな変化はない。

○　35 人学級制度を他学年に広めたいかについては、ほぼ９割の保護者が拡大を望んでおり、年度ごとの割合に大きな変化はない。

＜結果＞

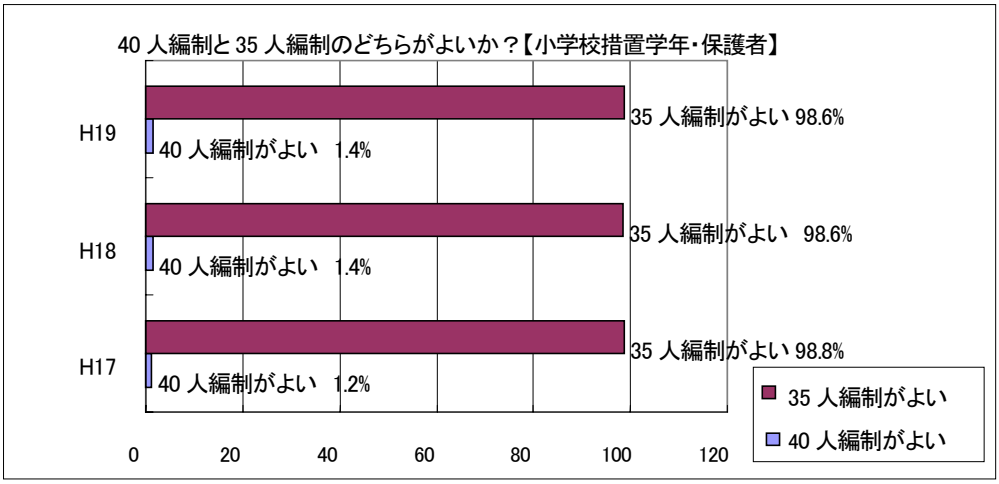
〔問１〕35 人学級制度を知っているか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　知っている	561 人	40.6%	820 人	59.6%	3,599 人	78.5%
イ　知らない	820 人	59.4%	1,424 人	37.0%	987 人	21.5%



〔問２〕１学級の編制人数は、40 人編制と 35 人編制のどちらがよいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　40 人がよい	16 人	1.2%	50 人	1.4%	64 人	1.4%
イ　35 人がよい	1,356 人	98.8%	3,560 人	98.6%	4,597 人	98.6%



〔問３〕〔問２〕で、ア（40 人編制がよい）と答えた理由

＜学級人数が減っても、効果には大差がないのではないか等＞
- ５人の差はそれほどではないと思う。
- 35 人学級になってもクラスの雰囲気や勉強への取り組み方は、あまり変わらないと思う。
- 人数が減って、先生の目が一人一人に行き届いているとか、成績がよくなったとか，具体的なことがよく分からないので何とも言えない。

＜社会性の面からは必ずしも、学級人数が少ない方がよいわけではないのではないか等＞
- 集団行動に、特に人数は関係ないと思う。
- 35 人でもいいと思うが、人数が多いと子どもの関わりももう少しでき、色々な面で、刺激や思いやりなども感じることができ、他の子との競争心が出ていいのではないか。

＜他の方法があるのではないか等＞
- 算数など特にみんなから遅れる子がいるようなら、級外などが個別に指導すればよい。40 人でも問題がないと思われる。
- 教員の雇用費を、他のところに使うべき。

〔問４〕〔問２〕で、イ（35 人編制がよい）と答えた理由

＜子ども同士の関係がよくなるのではないか等＞
・　子ども同士もお互いを理解し合い、交流が深まる。
・　子供同士のつながりや関係も密になっている。
・　人数が少ないことで、児童同士の関係が密になっている印象を受けます。その結果、子ども自身がクラスの友達をとても大切にしている様子が伺え、親としては嬉しいことです。
・　40 人学級だと１クラスになってしまう。６年間ずっと１クラスでは子どもにとってもよくないと思う。できれば 30 人以下学級を希望。

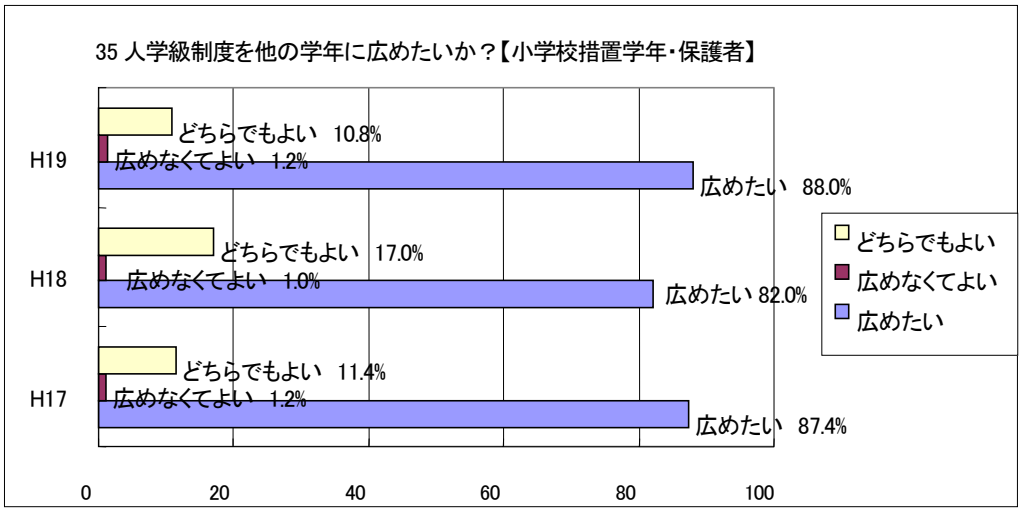
＜よりよい教育活動が展開されるのではないか等＞
・　子どもと教師のかかわりがより深くなり、円滑な人間関係が生れる。
・　少人数の方が子供たち一人一人に目が行き届きやすい。親としても安心できる。
・　教師と子どもとのコミュニケーションがとれやすくなり、それぞれの子どもにとっても学級の中でいろいろな役割を体験する機会が増える。
・　学力低下や学級崩壊を防ぐためにも、少人数制が望ましい。いじめの問題や心のケアの面でも少人数が有効である。
・　子どもたちの個性をより把握しているのでありがたい。個性を生かす指導をしてほしい。
・　一人一人の性格まで分かっていただき、気を配っていただけていると思っています。
・　先生に各子供のことを分かってもらえると思う。子供たちも「先生が見てくれて声をかけてくれた。」と言い、毎日楽しく過ごせている。

＜教職員の負担軽減になるのではないか等＞
・　１年生は給食にしても片付けにしても授業以外の大変さが多いと思うから。
・　情報も多く、環境も複雑になっている子どもたち、保護者の対応も大変。
・　不審者対策を含め、先生方の負担も以前より大きいと感じます。

＜教育環境がよくなるのではないか等＞
・　教室の広さから 35 人までがよい。むしろ 35 人でも多いと感じる。
・　窮屈さがなくて、子どももゆったりとよい環境で学べると思います。
・　後ろの席の生徒も黒板がよく見えて、集中力が高まる。低学年は、35 人と言わず、30 人以下にしてほしい。市費で雇用することに疑問。

〔問５〕他の学年に広めたいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　広めたい	1,191 人	87.4%	3,282 人	82.0%	4,118 人	88.0%
イ　広めなくてよい	16 人	1.2%	41 人	1.0%	57 人	1.2%
ウ　どちらでもよい	155 人	11.4%	681 人	17.0%	506 人	10.8%



② 中学校措置学年（H17 は中２年、H18・H19 は中２・３年）保護者

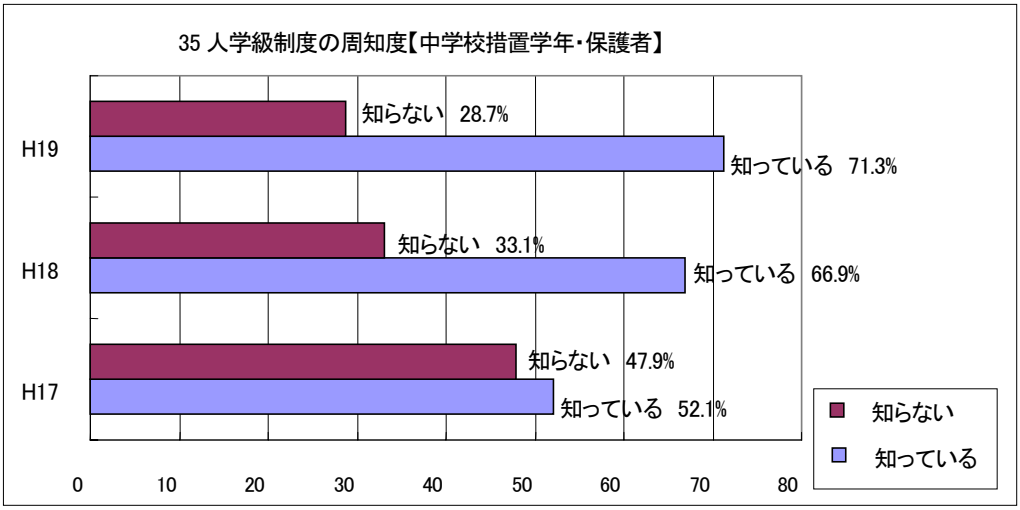
＜結果の概要＞

○　上記①の小学校措置学年保護者の結果とほぼ同様の傾向にある。

＜結果＞

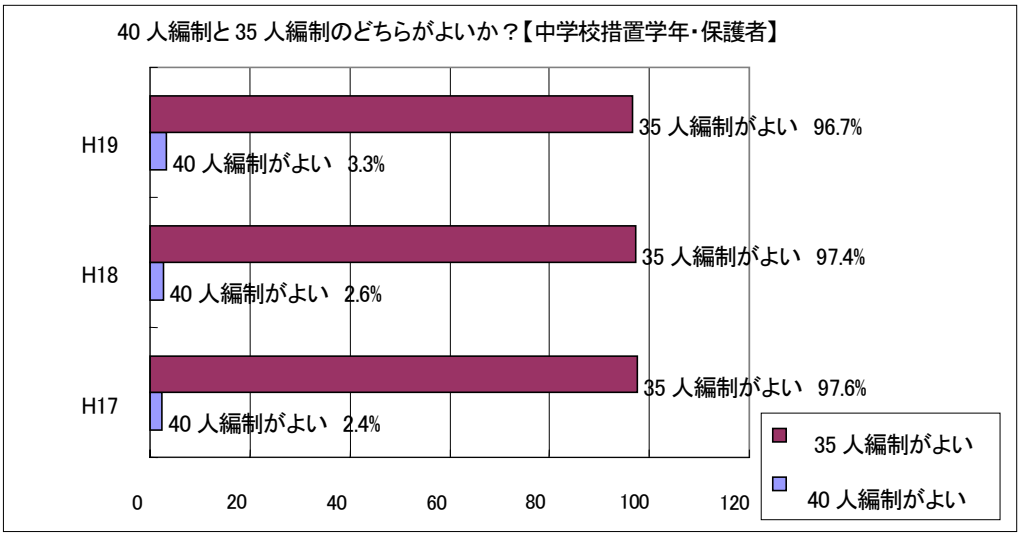
〔問１〕35 人学級制度を知っているか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　知っている	703 人	52.1%	1,743 人	66.9%	1,709 人	71.3%
イ　知らない	646 人	47.9%	861 人	33.1%	688 人	28.7%



〔問２〕１学級の編制人数は、40 人編制と 35 人編制のどちらがよいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　40 人がよい	34 人	2.4%	68 人	2.6%	78 人	3.3%
イ　35 人がよい	1,357 人	97.6%	2,527 人	97.4%	2320 人	96.7%



〔問３〕〔問２〕で、ア（40 人編制がよい）と答えた理由

＜学級人数が減っても、効果には大差がないのではないか等＞
- 35 人でも 40 人でも大差はない。少人数になるほど浮く子も出る。
- 少なくしたからといって効果があるか不明。あまり無いと思う。むしろ、生徒数を増やした方が逆に個性が出る気がする。

＜社会性の面からは必ずしも、学級人数が少ない方がよいわけではないのではないか等＞
- 合唱、運動会などクラス対抗のとき人数が多いほうがよい。
- にぎやかでよい。
- 中学生は集団の中で自分を確立させる時期であり、少人数だと個性が強く出すぎるし、先生とも近くなりすぎる。

＜他の方法があるのではないか等＞
- 教科によって少人数にしたり、教員を２人にしたりしてほしい。
- 人数が少なくなるからといって、すべての目が行き届くとは思えないし、もっと他に目を向けた方がよいのでは？
- あまりに「ゆとり教育」とか「週休２日制」とかいろいろ変化が多すぎる。もっと原点に帰って見直す必要があると思う。すべての子どもや大人がこういうことに賛成していると思わないで欲しいです。
- 教師の数を増やすよりも、子どもを管理できる教師がいればよい。
- 教員の採用がなかなか難しい状況にある場合は、無理をする必要はないと思う。私たちの時代は１クラスの人数は 50 に近かった。

＜学級が増えることにより、教育環境が悪くなるのではないか等＞
- 学級数が増えると、教室数や学年の教室配置に無理が生じる。
- 教師の増員・校舎の広さ等の問題があるため。

〔問４〕〔問２〕で、イ（35 人編制がよい）と答えた理由

＜子ども同士の関係がよくなるのではないか等＞
・　少人数集団の方がクラスがまとまりやすくなる。

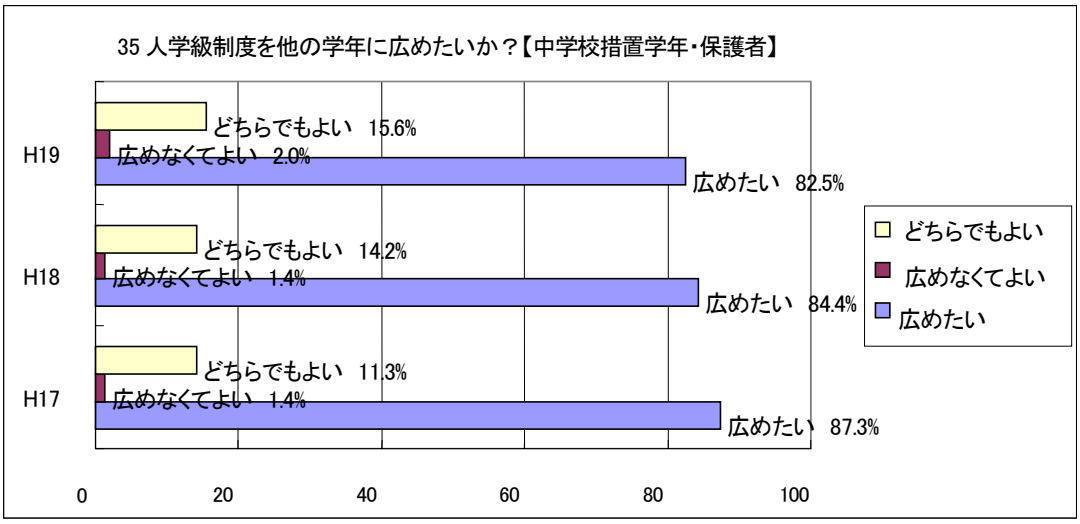
＜よりよい教育活動が展開されるのではないか等＞
・　学習面、生活面とも個を大切にした指導ができる。
・　子どもたちが集中して授業を受けることができる。
・　学習活動に余裕が生まれ、子どもたちの体験のチャンスが増える。
・　子どもの活躍の機会が増え、個性を伸ばすことができる。
・　１学級の人数が少ない方が、生徒一人一人にきめ細かな指導ができると思う。
・　クラス全体がまとまりやすい。子供の意見で発表がしやすいとのことです。
・　子どもの変化や授業の内容が理解できていないことなど、細かいところに気づくことができると思います。
・　勉強面だけでなく、学校生活の悩みなど相談することもあると思うが、先生自身が忙しすぎるとその時間はもてないと思うから。
・　精神的に弱い子が多く、いろいろな場面で細かい対応が望まれるため。

＜教職員の負担軽減になるのではないか等＞
・　中学生という思春期の子どもたちを指導されるのは、とても大変なことだと思います。一人一人に目が行き届くよう、35 人クラスの方がよいと思います。
・　教員免許をとる力があっても先生になれない人がたくさんいると聞く。もっと増やして。
・　先生の負担が減り、先生が余裕を持って子供と向かい合うことができる。（ただし物理的な余裕であって、実際には先生方の取り組み方で成果の出方は変わると思うが。）

＜教育環境がよくなるのではないか等＞
・　生徒用机・椅子が大きくなるため、人数が少ないとゆとりが生れる。
・　教室の広さから 35 人までがよい。むしろ 35 人でも多いと感じる。参観会でも親がゆったり見ることができる。
・　上の子のときは 40 ぐらいの学級で、教室も狭く感じたし、子どもたちも窮屈そうでした。今の方がすっきりしていますし、子どもたちものびのびしているように思います。
・　少子化になっているし、影響のある情報が氾濫している現代は、子どもたちはより理解しがたくなっているし、きちんと教育しなければいけないと思います。

〔問５〕他の学年に広めたいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア 広めたい	1,180 人	87.3%	2,197 人	84.4%	1,984 人	82.5%
イ 広めなくてよい	19 人	1.4%	36 人	1.4%	47 人	2.0%
ウ どちらでもよい	152 人	11.3%	371 人	14.2%	374 人	15.6%



（2）教職員

① 小学校措置学年（H17 は小１年、H18 は小１～３年、H19 は小１～４年）学級担任

＜結果の概要＞

○ 小学校措置学年の担任全員が 35 人編制を望んでいる。

○ 35 人学級制度を他学年に広めたいかについては、ほぼ 100%の担任が望んでいるが、平成 19 年度にはじめて「広めなくてよい」とする担任が３人となった。

○ 35 人学級制度の効果については、「大いにある」と「ある」で 100%であるが、「大いにある」の割合は、年度を追う毎に減少している。

（「大いにある」　平成 17 年度　94.4%　⇒　平成 19 年度　64.6%
　「ある」　　平成 17 年度　 5.6%　⇒　平成 19 年度　35.4%）

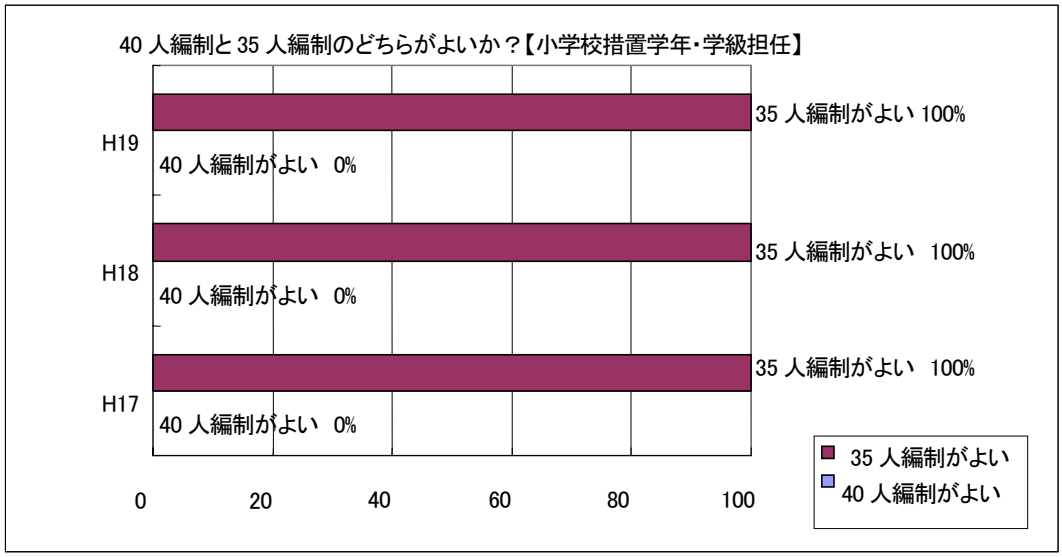
○ 35 人学級の指導における成果について、「健康状態の把握がしやすい」「授業中、多くの児童に直接言葉をかけることができる」「活動スペースが確保でき、児童が活動しやすい」「一人一人が学級の中で活躍できる機会が多くなった」の面に、“ 成果が大いにある ” と答えている担任の割合が多い。

○ 反対に「ノートへの朱書の機会が増え、児童の学習意欲が高まっている」「ノートの点検の機会が増え、児童の実態を把握しやすい」「授業中、多くの児童が発言する機会がある」の面には、“ 成果が大いにある ” と答える担任の割合が少ない。

＜結果＞

〔問１〕１学級の編制人数は、40 人編制と 35 人編制のどちらがよいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　40 人がよい	0 人	0%	0 人	0%	0 人	0%
イ　35 人がよい	54 人	100%	155 人	100%	311 人	100%



〔問２〕〔問１〕で、ア（40 人編制がよい）と答えた理由

なし

〔問３〕〔問１〕で、イ（35 人編制がよい）と答えた理由

＜よりよい教育活動が展開されるのではないか等＞

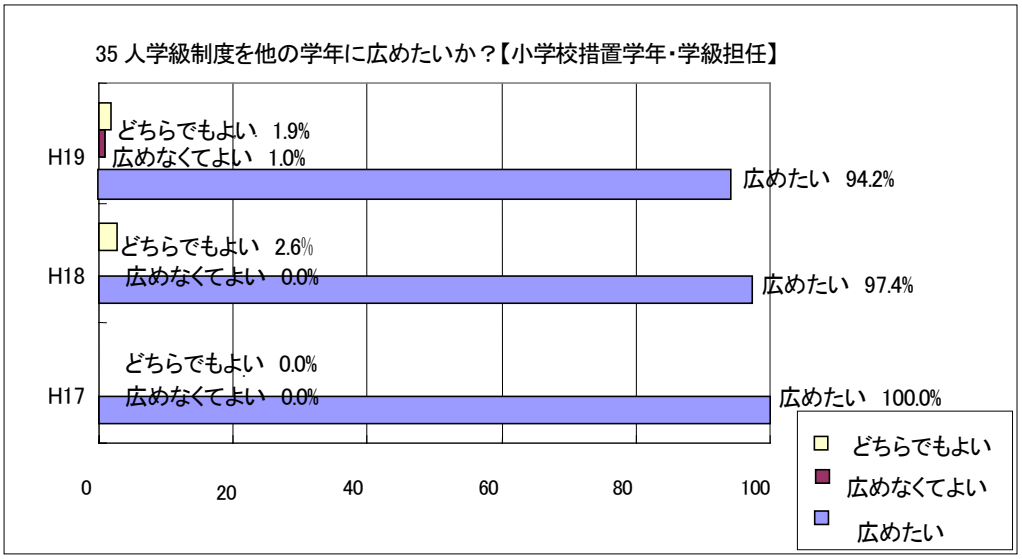
・　小学校の入門期は、個への対応が特に重要である。
・　集中できない子どもが年々増えているため。
・　一人一人の声をより深く聞くことができ、信頼関係が深まる。
・　少人数学級により、一人一人に目が届きやすく指導がしっかりできる。
・　いろいろな活動に多くの子どもに活躍の場が与えられる。
・　一人にかかる時間も増え、個に応じたより細かい指導ができる。子どもたちと関わる余裕や時間がうまれた。
・　年々、特別支援を必要とする児童が増えており、個への対応の限界が感じられるので、少しでも少人数学級の実現してほしい。児童や保護者の姿が多様化している現在、とても有効な制度である。学校生活に教師も子どももうるおいが生まれ、良い教育効果が期待できる。

＜教育環境がよくなるのではないか等＞

・　教室が広く使え、場の工夫ができる。

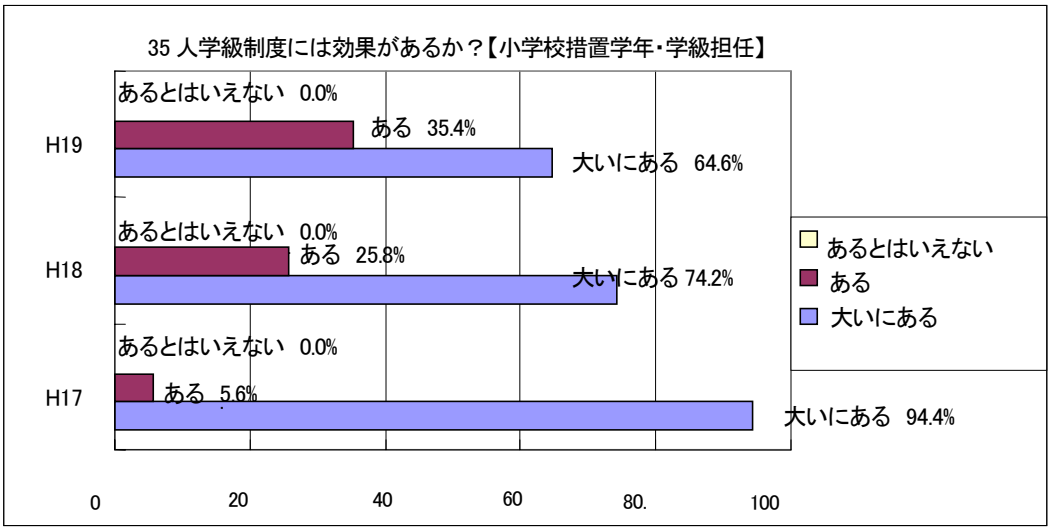
〔問４〕他の学年に広めたいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　広めたい	54 人	100%	151 人	97.4%	293 人	94.2%
イ　広めなくてよい	0 人	0%	0 人	0%	3 人	1.0%
ウ　どちらでもよい	0 人	0%	4 人	2.6%	6 人	1.9%



〔問５〕制度には効果があるか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　大いにある	17 人	94.4%	72 人	74.2%	84 人	64.6%
イ　ある	1 人	5.6%	25 人	25.8%	46 人	35.4%
ウ　どちらともいえない	0 人	0%	0 人	0%		
エ　あるとはいえない	0 人	0%	0 人	0%	0 人	0%



〔問６〕〔問５〕でア（効果が大いにある）又はイ（効果がある）と答えた理由

＜子ども同士の関係がよくなるのではないか等＞
・　子ども同士のコミュニケーションの場が増えた。
・　（単学級がこの制度により２クラスになったことにより、クラス間で）お互い意識し合い切磋琢磨するようになった。

＜よりよい教育活動が展開されるのではないか等＞
・　学級全員に表現の機会を多く与えることができる。
・　友達とのかかわりを深めるための声掛けができる。
・　子どものつぶやきにすぐに対応できる。
・　時間をかけて一人一人の子どもと接することができ、互いの理解が深まる。
・　子ども一人一人とのかかわる時間が増えるので、活躍の場が増え、生き生きできる。
・　子どもを認める機会が増え、自信を持って活動する子どもの数が増えた。
・　少人数で行えば、声かけも増え、子どもが「わかった」とうれしそうにする姿が多くなった。
・　一人一人のノートを細かく見ることができるため、丁寧に書く子が増えた。

＜保護者との連携をうまく図ることができるのではないか等＞
・　子どもの様子を連絡帳や本読みカードで細かく伝えられる。（本読みカードにコメントを書く時間がとりやすくなり、子どものその日にあった様子をすぐに伝えることができる。）
・　懇談会で一人一人の発言の機会が多くなる。
・　保護者とのコミュニケーションが綿密にとれている。
・　子どもに目がいき、体調を見守ったり、話を聞く余裕が生まれたりするので、それが親にも伝わる。
・　保護者との連絡がしやすい。家庭訪問や面談の計画が組みやすく変更に対応しやすい
・　一人一人の児童をしっかりみることができるので、子どもの様子を伝えやすい。

＜教職員側によい変化が生じるのではないか等＞
・　教師にゆとりが生まれるので、児童も落ち着きが出る。
・　若い先生が増え、子どもたちに活気が生まれた。
・　人手が増え、あらゆる面で充実し、ゆとりが生まれた。
・　複数での教材研究ができる。様々な意見を出したり、考え合ったり、協力し合って活動できたりする。
・　事務処理の時間が減るので、その分子どもと接することができる。
・　宿題点検の時間が短縮され、教材研究などの時間に費やせるようになった。
・　学年のいろいろなことを２人で分担でき、効果を感じている。
・　作業などでも、手をかけてあがられるため、子どもも満足するので、自分にも心の・ゆとりができ、明日への希望がよりわいてきます。
・　一人にかかる校務が軽くなり、一つずつの仕事を充実させることができる。
・　ふるさと先生指導があり、そのおかげで授業に自信がついた。

②　中学校措置学年（H17 は中２年、H18・H19 は中２・３年）学級担任

＜結果の概要＞

○　中学校措置学年の担任全員が 35 人編制を望んでいる。

○　35 人学級制度を他学年に広めたいかについては、ほぼ 100%の担任が望んでいるが、年度を追う毎に「どちらでもよい」が増加している。

○　35 人学級制度の効果については、「大いにある」と「ある」で 100%であるが、「大いにある」の割合は、平成 18 年度増加したものの、平成 19 年度には減少している。

（「大いにある」　平成 18 年度　57.1%　⇒　平成 19 年度　45.8%
　「ある」　　平成 18 年度　39.0%　⇒　平成 19 年度　54.2%）

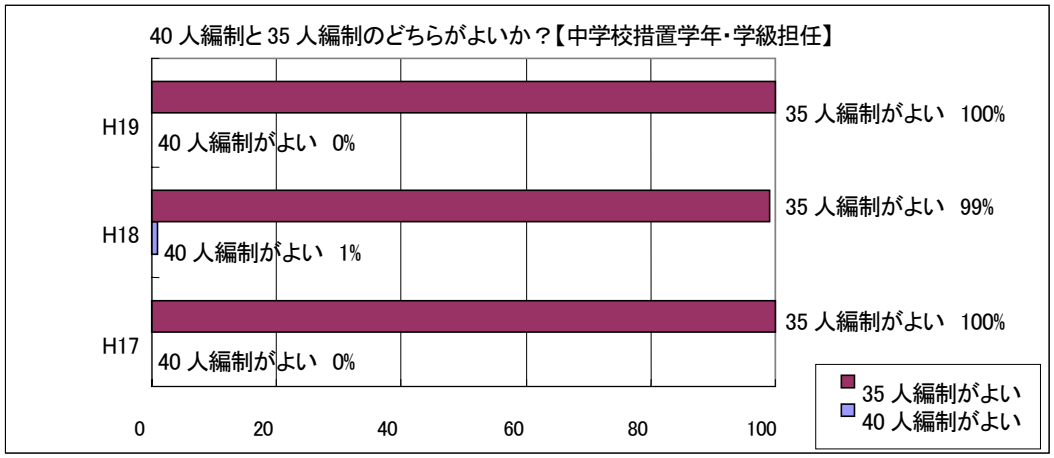
○　35 人学級の指導における成果について、「担任の目が行き届き、生徒の実態を把握しやすい」「活動スペースが確保でき、児童が活動しやすい」「授業中、多くの児童生徒に直接ことばをかけることができる」「安全管理がしやすい」の面に、“成果が大いにある”と答えている担任の割合が多い。

○　反対に「生徒の人間関係を把握しやすく、トラブルを未然に防ぐことができる」「児童生徒が学校生活にスムーズに適応できている」「ノート点検の機会が増え、生徒の実態を把握しやすい」の面には、“成果が大いにある”と答える担任の割合が少ない。

＜結果＞

〔問１〕１学級の編制人数は、40 人編制と 35 人編制のどちらがよいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　40 人がよい	0 人	0%	1 人	1%	0 人	0%
イ　35 人がよい	51 人	100%	99 人	99%	148 人	100%



〔問２〕〔問１〕で、ア（40 人編制がよい）と答えた理由

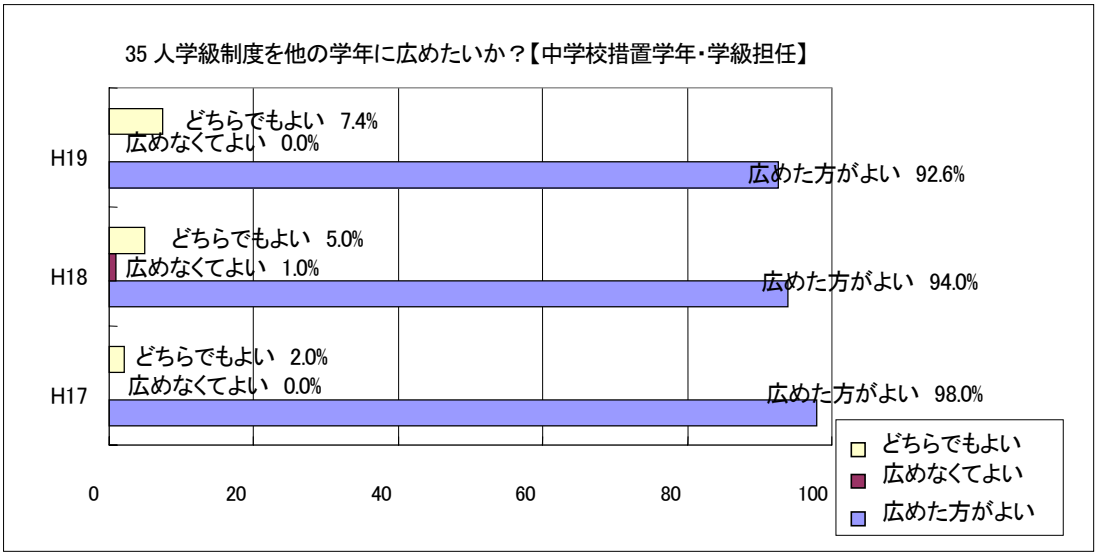
不明

〔問３〕〔問１〕で、イ（35 人編制がよい）と答えた理由

＜よりよい教育活動が展開されるのではないか等＞
- 生徒一人一人を理解した上で、個にそった指導がじっくりできる。
- 担任の事務処理が軽減され、生徒との触れ合いの時間が増加する。
- 外国人生徒も増加の傾向にあり、少人数での指導が必要である。
- 実習がある教科は安全面でもより細かな注意をはらうことができる。

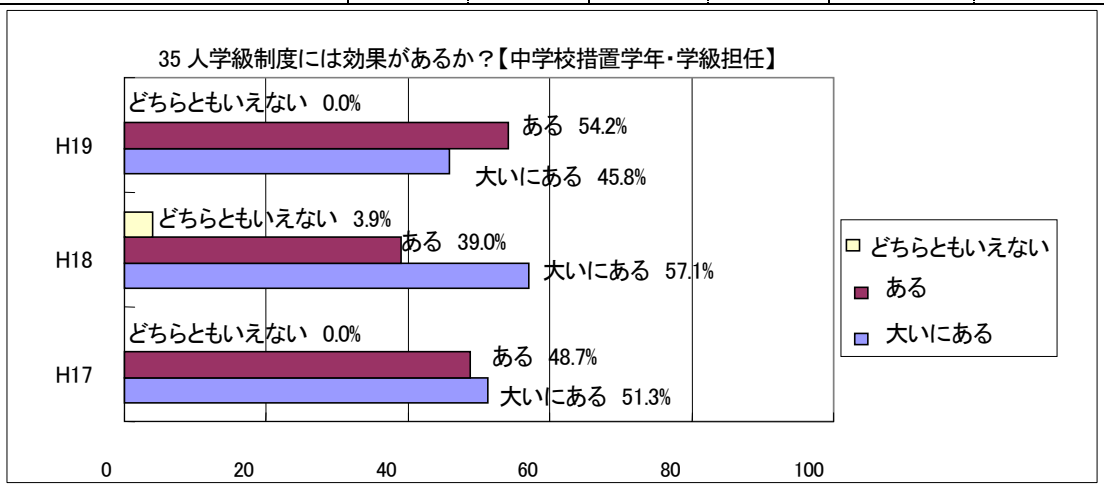
〔問４〕他の学年に広めたいか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア 広めたい	50 人	98.0%	94 人	94.0%	137 人	92.6%
イ 広めなくてよい	0 人	0%	1 人	1.0%	0 人	0%
ウ どちらでもよい	1 人	2.0%	5 人	5.0%	11 人	7.4%



〔問５〕制度には効果があるか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
ア　大いにある	20 人	51.3%	44 人	57.1%	38 人	45.8%
イ　ある	19 人	48.7%	30 人	39.0%	45 人	54.2%
ウ　どちらともいえない	0 人	0%	3 人	3.9%		
エ　あるとはいえない	0 人	0%	0 人	0%	0 人	0%



〔問６〕〔問５〕でア（効果が大いにある）又はイ（効果がある）と答えた理由

＜子ども同士の関係がよくなるのではないか等＞
・　それぞれの学級のまとまりがよくなっている。
・　学級内で人間関係を深めようとする生徒が増えた。団結力が感じられる。

＜よりよい教育活動が展開されるのではないか等＞
・　生徒の能力に応じた学習指導がよりしやすくなった。
・　生徒の活躍の場が多くなり、学級に活気がでた。
・　個々の生徒に細やかな心配りをする時間と余裕が生まれて、一人一人の生徒にかかわる時間が増えた。
・　落ち着いた学校生活を送っていると思う。
・　リーダー経験のチャンスが増え、自己肯定感の育成の効果がある。
・　より多くの教師が生徒に関わるので、指示が行き届きやすい。

＜保護者との連携をうまく図ることができるのではないか等＞
・　人数が少ない分、保護者への対応も少し丁寧にできるようになった。
・　面談や家庭訪問でも十分に時間がとれるようになった。
・　保護者とのコミュニケーションが綿密にとれている。

＜教職員側によい変化が生じるのではないか等＞
・　一人一人へのメッセージが確実に多くかけられるようになった。
・　ふるさと先生ではあるが、とても力があり、担任として学年の中で責任を果たしてくれているし、そのきめ細やかな指導には、自分を見直す機会を与えてもらった。
・　個性的な生徒に対して、複数の教員で多角的に指導できるチャンスが増えたので、指導が成果に結びつきやすくなった。
・　教員の人数が増え、校務や学年分掌等が軽減され、生み出された時間で学級の仕事や生徒と接することができる。
・　成績処理や採点等の時間が短縮され、教材研究等の時間が確保できる。ノートを点検する時間が短縮される分だけ個々の生徒への対応・指導ができる。

〔問７〕〔問５〕でウ（効果の有無についてどちらともいえない）又はエ（効果があるとはいえない）と答えた理由

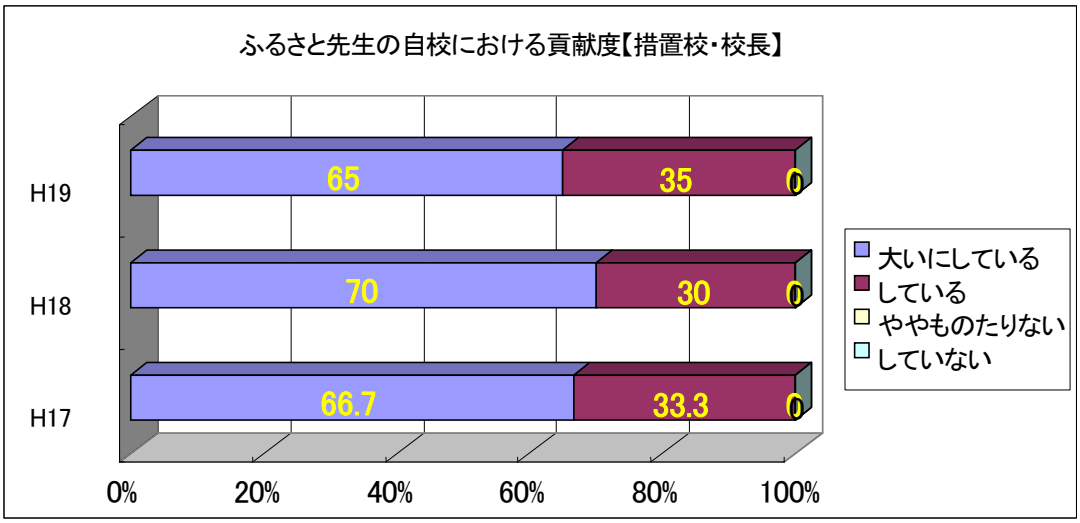
・　教育的効果はとても大きいが、ふるさと先生の身分をさらに改善する必要がある。
・　ふるさと先生を配置するだけでなくフォローをする体制の強化が必要。

③　措置校校長

＜結果＞

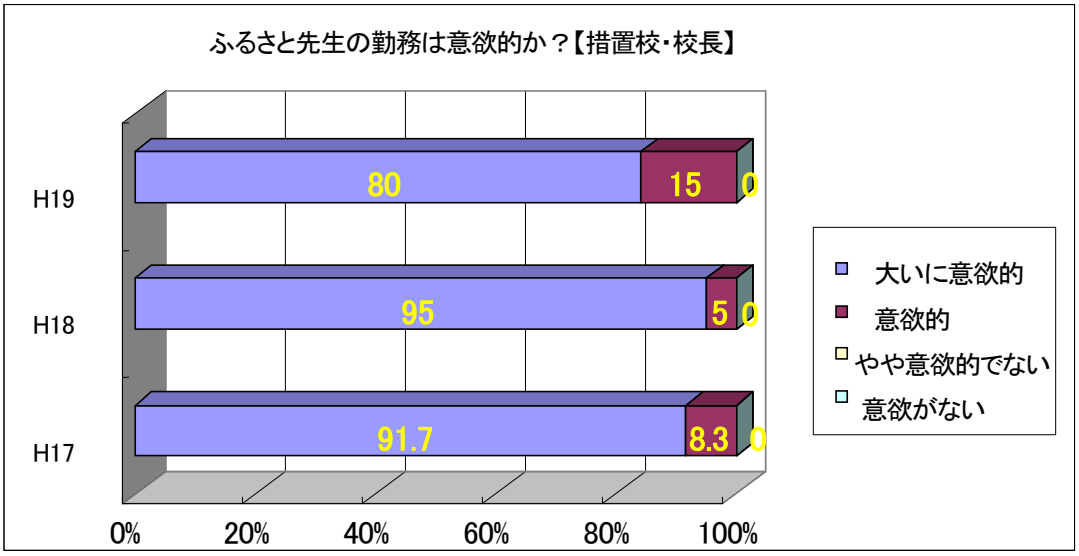
〔問１〕ふるさと先生の自校における貢献

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
大いにしている	８校	66.7%	14 校	70.0%	13 校	65.0%
している	４校	33.3%	６校	30.0%	７校	35.0%
ややものたりない	０校	0%	０校	0%	０校	0%
していない	０校	0%	０校	0%	０校	0%



〔問２〕ふるさと先生の勤務は意欲的か。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
大いに意欲的	１校	91.7%	19 校	95.0%	16 校	80.0%
意欲的	１校	8.3%	１校	5.0%	３校	15.0%
やや意欲的でない	０校	0%	０校	0%	０校	0%
意欲がない	０校	0%	０校	0%	０校	0%

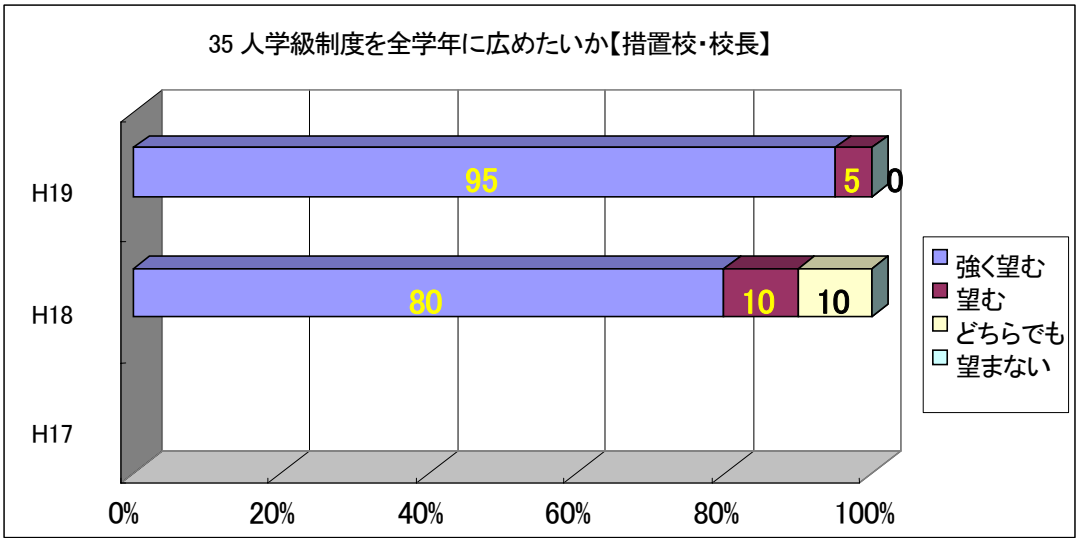


〔問３〕現在のふるさと先生が来年度も継続して自校に勤務することを希望するか。

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
望む	12 校	100%	20 校	100%		
望まない	０校	0%	０校	0%		

〔問４〕35 人学級制度を全学年に広めたいか

	平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度	
強く望む			16 校	80.0%	19 校	95.0%
望む			２校	10.0%	１校	5.0%
どちらでも			２校	10.0%	０校	0%
望まない			０校	0%	０校	0%



〔問５〕35 人学級制度の効果

＜よりよい教育活動が展開されるのではないか等＞

- １学級の人数が 30 人程度になったことにより、いろいろ面で子どもに目が行き届き、そのことが学級・学年の安定につながっている。
- 地域に出る学習を積極的に行うようになった。
- 低学年では、少人数であればあるほど学校生活、学習の基盤を丁寧に指導できる。
- 中学年等では、きめ細かなコミュニケーションがとれ児童理解につながっている。
- 物理的、精神的なゆとりが生まれた。
- 日々の生活の中で生徒の人数が少なくなり、担任として掌握しやすくなった。
- 昨年より平均で６名程度欠席が減った。
- 生徒の活躍の場の増加･･･１学級増に伴い、役割につくことも増加する。学年の活性化が図られた。

＜教職員側によい変化が生じるのではないか等＞

- 経験の浅い教師も、ゆとりを持って指導できるようになった。
- 実務上のゆとりだけでなく、精神的なゆとりが生じ始めている効果は大きい。
- 事務処理の量が減った。
- 教室にゆとりを感じる。

以上、概観したように、制度導入後の３年間（平成 17 年度～平成 19 年度）において、35 人学級を実施した措置学年等の保護者・教職員を対象としたアンケート調査結果においては、ほとんどの保護者及び教職員が、本制度の継続・措置学年の拡大を望んでいること、学習面や生活面での効果を感じていること等が明らかになっており、本制度に対して絶大な感覚的支持があることは明らかである。

しかしこれらは、あくまで、それぞれの主観に基づいたアンケート調査であるため、その結果の客観性・実証性については、不十分であると言わざるを得ない。

そこで、より客観的なデータに基づいて、以下、効果検証を行うこととする。まずは、静岡県措置であり、中学１年のみを対象とした少人数教育制度である「中１支援プログラム」導入前後の比較と、磐田市における「35 人学級制度」導入前後の比較を行っていく。

次に、先行研究を概観した上で、検証モデルを作成し、学級規模と「確かな学力の育成面」及び「豊かな心の育成面」に関する効果とに有意差があるのか否かを明らかにすることとしたい。